

紙本着色 江戸時代(十七世紀)
縦三五〇×三五二
長九五〇・四×一七九・二

「酒伝童子」(酒天童子、酒呑童子とも書く)は、源頼光による鬼退治の物語で、早くより流行して絵巻や絵本の題材として頻繁に取り入れられ、後世まで長く人気を博した武家ものの代表作である。この物語は、「大江山絵詞」(南北朝時代、逸翁美術館所蔵)のように、鬼の棲処を丹波国大江山とするものと、元信本「酒伝童子絵巻」(三巻、室町時代、サントリー美術館所蔵)のように近江国伊吹山とするものとの二系統に分類されている。本絵巻は伊吹山系の作品で、物語の展開は次の様である。

一條天皇の時代、都で若く美しい女房が姿を消すという事件が相次いで起った。池田中納言國方の一人娘もある夜姿を消してしまった。國方は都で評判の清明という相人に占わせ、事件は近江の伊吹山の奥の千丈ヶ嶽に住む鬼の仕業であると判明、公卿たちは源頼光に討たせることとした。勅命を受けた頼光は、藤原保昌と家来の四天王・渡辺綱、坂田公時、碓井貞光、卜部末竹と共に、それぞれの氏神、八幡、住吉、熊野に参詣した後、山伏姿に変装して伊吹山目指して出発した。途中、翁山伏、青年の姿に化身したそれぞれの氏神に助けられ、また心中を読まれないという帽子甲や毒酒を授かって、鬼の棲家近くまで辿り着き、谷川で洗濯する女房から鬼の様子を聞き出した。鬼の館に着いた頼光一行は酒伝童子と対面し、自分たちは出羽国羽黒山の山伏と名乗り、童子に怪しまれないよう、人血の酒や人肉のもてなしを受け、また頼光らは返礼に毒酒を勧め、舞い踊って見せた。やがて童子らは酔いつぶれて寝所にもどり、眷属の鬼たちも倒れ伏した。頼光らは二人の女房から童子の寝所の様子を聞いて案内され、再び現れた氏神の助けを借りて侵入した。頼光は鬼の姿で横たわる童子の首を掻き切り、一行は眷属の鬼たちをも次々と倒していった。そして岩屋に捕らわれていた國方の娘ら三十余人の女房たちを救出して都に連れ返った。そして物語の最後は、頼光らの偉業を讃え、さらにこれらの次第は神仏の加護によるものと締め括っている。

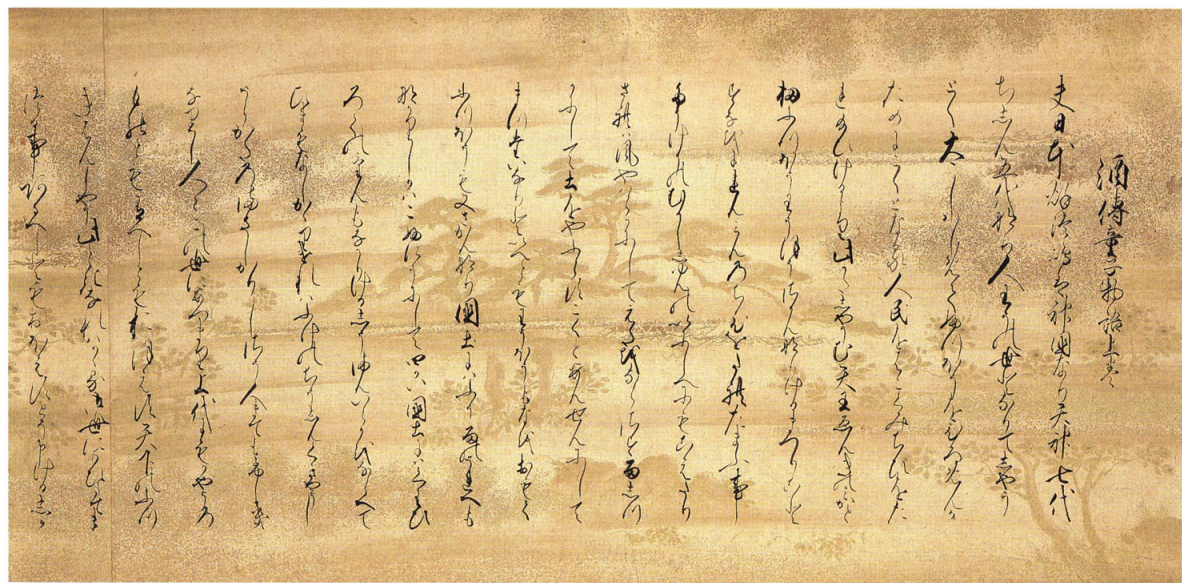
本絵巻は全五巻、全三十一段で構成されているが、第一巻第一段冒頭に「酒傳童子物語上巻」、第二巻五段目に「同 中巻」、第四巻二段目に「同 下巻」とあり、この絵巻のとは三巻本であることは明らかである。詞

書の文章の内容は三巻構成の元信本と近いが、元信本が漢字を多く交えた文章であるのに対して本絵巻は仮名書主体の文章である。また元信本の第一段に相当する部分の本絵巻では二段に分かれているなど、詞書と絵の構成にいくつかの相違が見られたり、両者それぞれに共通しない絵が互いにあること、それぞれに錯簡部分があることなどから考えて、元信本と本絵巻は、同内容の文章から作られた別系統の三巻本絵巻である可能性がある。

一方、本絵巻と同内容の文章を仮名書で記す岩瀬文庫本絵巻(五巻)と比較した場合、詞書の文章が所々で異なること、本絵巻最後の詞書が岩瀬文庫本では大きく欠落していること、段数(絵場面数)は本絵巻の方が一段多くて絵の挿入が適切な位置にあること、岩瀬文庫本には三巻本の形跡が残っていないことなど、本絵巻が系統を同じくする岩瀬文庫本に先行する存在であるとも考えられる。

さて本絵巻は、日清戦争(明治27、28年)の折、明治天皇が広島大本営に御逗留中に池田仲博より献上された作品である。侯爵池田仲博は因州池田家の当主、江戸幕府最後の将軍・徳川慶喜の五男であった。従って本絵巻が因州池田家の伝来品であったのか、仲博が因州池田家に入る際に持参したものの速断は出来ないが、元信本が北条家から徳川家を経て池田家へと伝来したことを考えると、両者の関係に興味深いものがある。

詞書は一筆で、詞書部分の金銀泥による下絵はその意匠に創意性が感じられる見事な装飾絵である。また絵画面は全体を金泥あるいは金箔地とし、鮮やかな多色を用いて細部まで実に丁寧に描いている。描写には独特の雰囲気があり、その画風は狩野派などの既成の流派に限定できず、その画風は狩野派などの既成の流派に限定できず、かといって単に町絵師の作と片付けてしまふべきものでもないであろう。この絵巻の存在には、岩佐又兵衛の豪華な絵巻との共通性を認めるべきであり、大名の婚礼調度の品として制作された可能性も考えられる。又兵衛絵巻と同じく江戸時代初期の制作と考えられ、近世絵巻のあり方を示す作品として興味深い絵巻である。



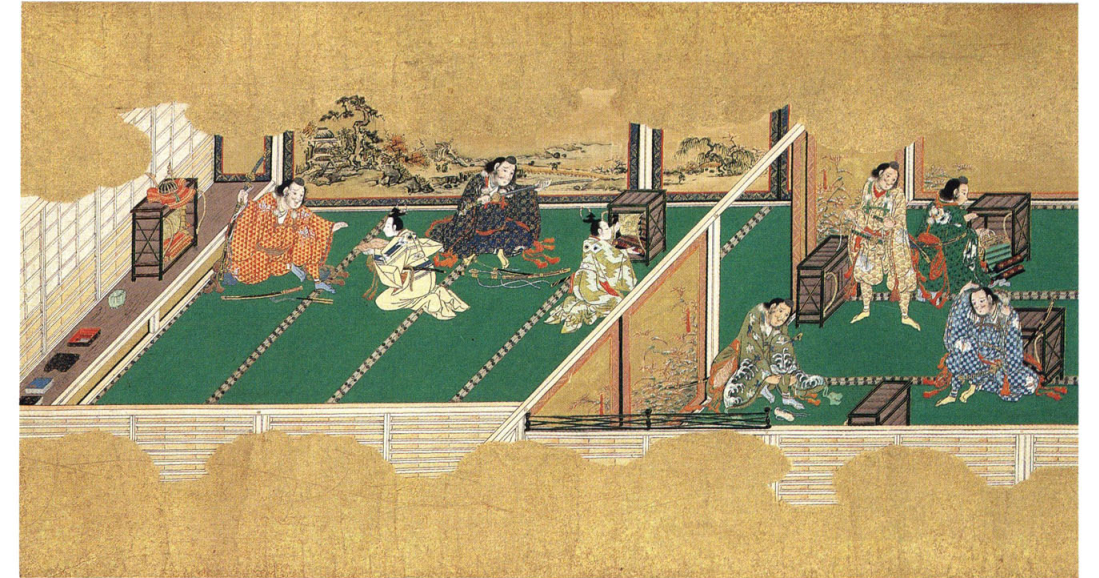
第1巻第1段詞



頼光らはそれぞれに八幡、住吉、熊野に参詣して、鬼退治の成功を祈願する 第1巻第5段



頼光一行、川で洗濯する女に尋ねる 第2巻第5段



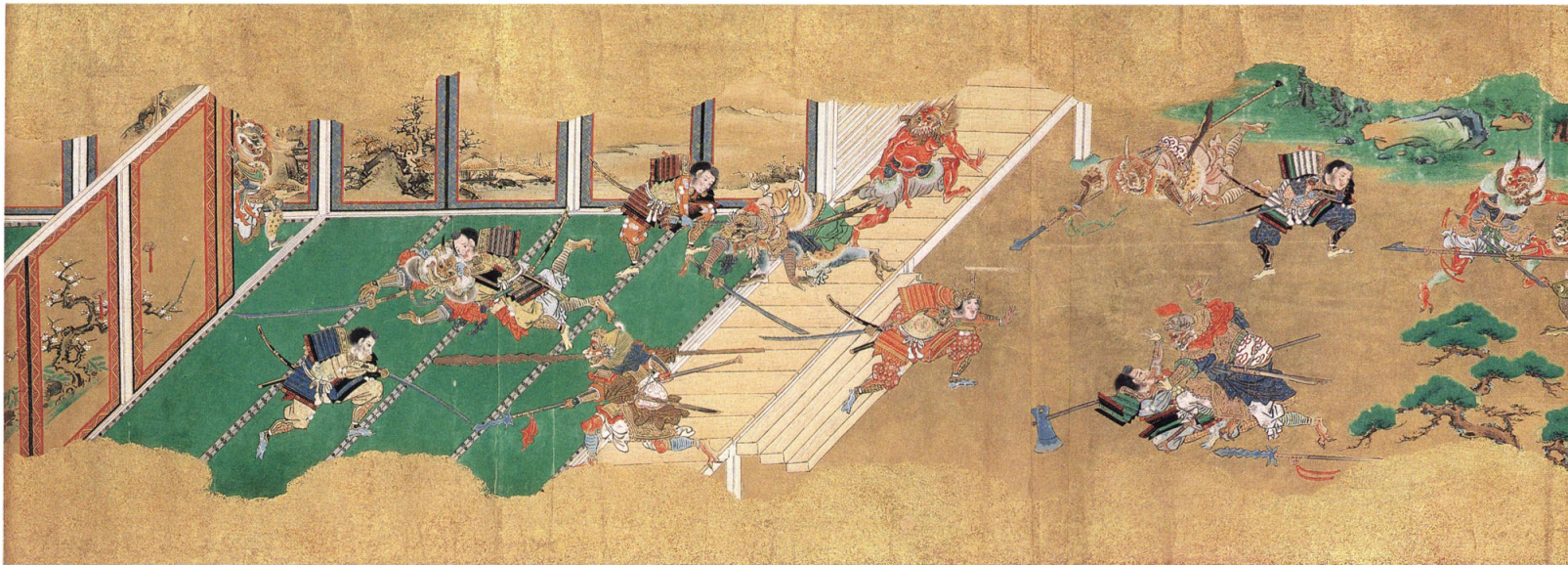
頼光らはそれぞれの武具を笥に入れ、出立の準備をする 第1巻第6段



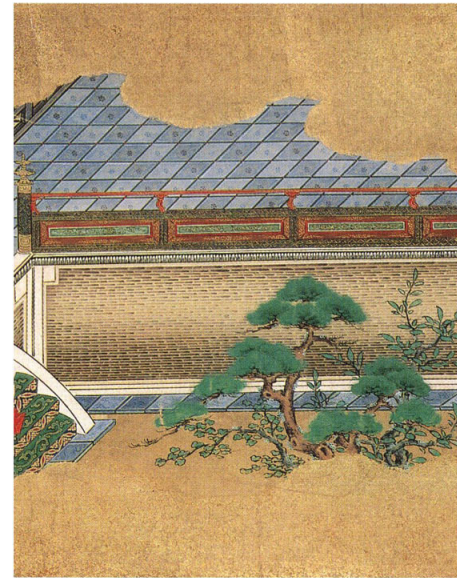
酒伝童子の館内。都よりさらってきた女房を侍らせ、多くの眷属を従え、四方四角には春夏秋冬を飾っている。 第2巻第7段



頼光一行、酒伝童子の寝所を襲い、討ち果たす 第4巻第4段



頼光一行、眷属の鬼たちと戦う 第4巻第5段



頼光一行、酒伝童子の血酒や人肉のもてなしを受ける 第3巻第2段



頼光一行、鬼たちに毒酒をふるまう 第3巻第6段





岩屋にとじ込められた女たちを助ける 第5巻第4段



頼光一行、岩屋を護る鬼と戦う 第5巻第2段



頼光一行、童子の首と助けた女たちを連れ、都に凱旋する 第5巻第6段

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

近世絵巻の興起―物語り絵の諸相

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 16

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 大塚巧藝社

翻訳 鶴岡厚生

発行 宮内庁

平成九年七月五日発行

© 1997, Museum of the Imperial Collections